

エッセイ「印象に残った手術看護」（看護師の部）

最優秀賞受賞作

記憶に残らない看護

斎藤 友厚

看護大学生が夏休みを利用して、下顎骨形成の手術を受けに来た。

術前訪問に行くと開口一番「全身麻酔下で意識のない患者さんと関わる、手術室看護師のやりがいは何ですか？」と尋ねてきた。続けて「私は絶対に病棟勤務。患者さんに動きがあるし感謝もされる」と話す。

私は「患者さんにとって手術とは、人生において大きな転機となります。そのような人生の転機に携わることができる手術室看護を私は誇りに思っています。病棟や外来のように患者さんに名前や顔を憶えてもらえることはありません。でもそれは、手術室内で看護がうまくいった証拠なのです。なぜならば、患者さんが強い不安を抱くことなく手術室に入室し、合併症などのトラブルもなく退院を迎えられたために記憶に残らなかったということです。患者さんが手術を終え全身麻酔から目を覚ましたあと、身体には“手術の痕”が残っています。“手術の痕”以外に手術による障害や不快な記憶を残さない看護。つまり、私が目指しているのは『患者さんの記憶に残らない看護』です」と答えた。

手術翌日、術後訪問に行くと紙に何かを書き始めた。下顎骨固定中で上手く話せないからだ。そこには「当然、手術中の記憶はないけれど、手術が成功して私がここに居ることが看護がうまくいった証拠だね。手術室の『記憶に残らない看護』悪くないね。ありがとう」と感謝の気持が書かれていた。

続けて「術前訪問から全身麻酔導入前、術後訪問と私は看護師さんの名前も顔も覚えていて。覚えてもらえないというのは間違いだよ」と書かれていた。

私は笑いながら「生意気なこと言って」と言い返しながらも、うれしくて目に涙を浮かべた。

看護大学生に感謝され、手術室看護を理解してもらえたことに胸が熱くなった。

看護師として手術室で再会した時の喜びと感動を思い描き、ワクワクしながら病室を後にした。

（講評）

「私が目指しているのは、患者さんの記憶に残らない看護です」。この一文を読んだとき、思わず手が止まりました。覚えてもらえないことこそ、不安なく入室し、無事に退院できた証である——手術看護のいちばん言葉にしにくい部分を、これほどの確に、しかも押しつけがましくなく語られたことに感嘆しました。そのうえで翌日、看護学生が「私は

看護師さんの名前も顔も覚えている。覚えてもらえないというのは間違いだよ」と書き返す。この二重の返しに、感動しました。手術室に立つすべての看護師に読んでほしい一編です。

全身麻酔をかけ、手術を受ける患者さんにとって、手術中のことは記憶には残らないかもしれないけど、そこにはしっかりやらなければいけない看護があることを訴えており、その思いが看護学生にも伝わったことに心を動かされました。

また、手術看護を否定的に捉えていた看護学生の認識を肯定的に変えたことから、手術室看護師の実践の意味が見えました。

©2026 日本手術看護学会

エッセイ「印象に残った手術看護」（看護師の部）

優秀賞受賞作

招待状の向こう側

徳村 大揮

「花嫁姿ば見らんことには、まだ倒れられん。」

そう言って笑う患者の視線の先には、一通の封筒があった。術前訪問で病室を訪れた私は、その封筒に目を留めた。

大腸がんの手術を控えた患者は、柔らかな笑顔が印象的だった。しかし、その笑顔の奥には、突然決まった手術への不安と戸惑いが感じられた。

「腹の具合が悪うて病院に行ったらね、まさか手術になるとは思わんやった。」患者はそう言って苦笑したあと、封筒を大切そうになでた。

「来月、孫の結婚式があるとよ。」

その言葉に込められた思いは、私の心に強く残った。

「結婚式への出席を楽しみにされています。」

私はその思いを手術チームへ伝えた。術前カンファレンスで執刀医や麻酔科医、手術室看護師に共有し、さらに病棟看護師や薬剤師にも伝えた。患者の願いは、いつしかチーム共通の目標となっていた。

手術は無事に終了し、術後の経過も順調だった。離床も進み、患者は回復への歩みを重ねていった。

患者は私の姿を見るなり、あの招待状を取り出した。

「間に合いそうよ。」招待状を握りしめながら見せてくれた笑顔は、術前訪問で見た時よりもずっと晴れやかだった。

退院前に見せてもらった一枚の招待状。

その向こう側には、患者が取り戻したい未来があった。あの日の招待状は、今も私の心に

残っている。

(講評)

手術における目的は様々なものがあります。チームとして目的が統一されることは、チーム医療をより効果的なものにするのではないかと思います。また、手術の後にある患者さんの生活を見据えることの重要性を再認識できました。

そして、手術が無事に終わることをゴールとするのではなく、その先にある『患者が取り戻したい未来』に目を向けるという考え方が、とても素敵だと感じました。

©2026 日本手術看護学会

エッセイ「印象に残った手術看護」(看護師の部)

優秀賞受賞作

見えない看護

遠藤 舞香

手術室に配属され 2 年が経った頃、正直なところ手術室への配属は自分が希望したわけではなく、日々の手術業務を覚えるのに必死で手術看護を考える余裕などなかった。

ある日、くも膜下出血の患者の緊急手術が決まった。私がその患者の対応に介入した時はすでに薬剤での鎮静下にあり、目元はタオルで覆われていた。くも膜下出血の場合、「刺激は最小限に抑え、血圧の上昇による再出血を防ぐ」が絶対条件であり、この部分はいつも自分なりに意識して処置や看護は行っており、この日も無事に手術準備から実際の手術までを安全に終えたことに満足と安心した気持ちでいた。

数か月後、退院して外来診察に来ていた患者の姿を偶然見かけた。私は、『あの時の患者さんだ。元気になって良かった。』と密かに思い嬉しかった。そして、その患者が診察を終えた帰り際、「お大事にしてください」と一言だけ言った。すると、その患者は振り向いて「あなた私の手術の時傍にいてくれましたか?」と言った。『なぜ分かったのか。あの時は鎮静下の状態で、ましてや目元も覆われていて術前に私との面識はないのに。』と思ったが、「今あなたの声を聞いてあの時の事思い出したの。声かけながらさすってもらって安心したのよ。ありがとう。」と言ってくれた。私は『見えなくても声は聞こえていた。さすった温もり感じてもらっていた。』と自分が手探りで何気なく行っていた事が患者に伝わっていたことに、嬉しさでいっぱいになった。

この出来事から、見えない看護から温もりのある看護提供が自分の看護観となった。

手術室では、麻酔下で意識のない患者と接することが当たり前にある。だからこそ、この見えない看護をこれからの手術看護のなかでも大切にしていきたいと思っている。

(講評)

患者さんにとって見えない中でも、しっかり看護をすることの重要性を描いています。
自分に余裕がない中で行った看護（声かけ）が患者さんに届いていたと知ること、緊急手術を控える中でも安心を与えることができる、勇気をもらえる内容でした。
患者さんの安全のために科学的根拠に基づいた看護を必死で行っている、その中で患者さんの心に看護師の看護の心が届いていたことがわかり、自分の看護を見つめ直す機会となった看護実践だと思います。

©2026 日本手術看護学会